A．タタリノフ『レクシコン』注釈３（Ж～И）

江　口　泰　生

（まえがき）

「カド」について

これまで「A.タタリノフ『レクシコン』注釈1（A～Б）」（『岡山大学文学部紀要』62　2014.12）や「A.タタリノフ『レクシコン』注釈2（B～E）」（『岡大国文論稿』43　2015.3）において、『レクシコン』の見出しロシア語の意味を確定したり、日本語が何を指しているのかを確定したりするのが難しい場合があることを例示してきた。本稿もその一環である。

『レクシコン』13aに「жвака　кадо」とある。平仮名日本語はなく、キリル文字日本語は「カド」と読める。この項目は村山七郎『漂流民の言語』（吉川弘文館、1965）では欠落している。『漂流民の言語』では見出しロシア語の意味が不明のときに欠落する傾向があるが、この点はさておき、『教会スラヴ語ロシア語辞典』では「жвака」は「жвачка」（反芻、反芻される食物、噛みたばこ）と同じとある。現代語ではチューイングガムのようなものを指すこともあるようである。『レクシコン』では「жвака」＝「жвачка」に対して「カド」という日本語訳がなされているということである。

語中有声化していたり、長音が短縮していたりする可能性も考慮して、「カド」「カト」「カトウ」といった語を探してみると、東北地方ではニシンのことを「カド」と言うことや、「植物のおもだか（澤瀉）」を「カド」ということが『日本方言大辞典』に挙がっている。しかし、それらが見出しロシア語とどのように結びつくのか分からなかった。

ある日、「にしん」をネットで検索していると、ニシンのなかに「身欠きニシン」という保存方法があって、ニシンを干して固く乾燥させたものを言うらしいことが分かった。まさか知るまいと思ったものの、念の為に身欠きニシンのことを姫路市出身の家人に聞いてみると、「ニシン」といえば「身欠きニシン」を指すこと、普通は「身欠き」と言うこと、生ニシンはふだん近所の魚屋にはないこと、「身欠き」を米のとぎ汁でアクを抜きつつ戻したのち、甘辛く煮て昆布で巻いておせち料理の昆布巻きにするのだ、という具体的な説明が戻ってきた。これまで身欠きニシンという単語すら知らなかったので、たいへん驚いた。

さらにネットで検索してみると、古くは身欠きニシンをかじっておやつ替わりにすることもあったらしい。

「むかし、身欠きにしんを引き裂いて食べた。硬くて赤くすき通った身を口にいれると、じゅわーっと油が出てきて、どんなおやつより　おいしかった。今の子供は、あんなの、衛生、衛生でうるさくて食べさせてもらってないんちゃうかなぁ」（ニフティ・ブログ「たそがれをかがやいて」2004.2.13）

「その身欠きにしんを私は固いまんま食いちぎって食べてます！！！やわらかい物もあるんだけれど、この硬い奴をそのまま食べるのが北海道風！…（中略）…今の人たちはそのまま食べないそうだけど、うちの母親みたいに戦時中を経験している人たちは配給されるニシンを干して保存していたので、そのまま齧りながら遊びに行ってたんですよね」（GMOブログ「馬オタクでミスチル馬鹿の日記」2006.12.7）

「“身欠きにしん”をおやつ替わりに食べたこと、どこかのぶろぐで書きました。私は留萌に近いところで生まれ、しばらく住んでいたこともあって、“身欠きにしん”にはお世話になりました。」（「よこはまふらのつれづれぶろぐ」2010.5.5）

ほとんどが北海道の思い出で、しかも子供の頃の思い出として書いてある。現在では北海道以外ではこうした風習はないのかもしれない。しかしかつて佐井村ではニシンが獲れたことは確実であり（むつ市立図書館の山本隆悦氏ご教示の『佐井村誌』（佐井村役場、1971）による）、あるいはニシンを運んだことも確実であり（同前）、佐井村が北海道に渡る拠点でもあったことも確実であるから、身欠きにしたニシンをクチャクチャと齧るということがあったかもしれないと思い至った。

「身欠きにしん」はどんなものかと岡山駅前の岡ビル市場の乾物屋で求めてみたが、時期外れだったせいか、「年末しか置いてない」と言われた。困ったときのアマゾン頼みで、「北海道製造の上乾品」の「身欠きにしん」を注文してみた。しばらくして原産地はアラスカ、「函館」とある箱に入って、茨城県の海産物直売店から送られてきた。

以下の写真のように「二身」にすることからニシンという名称がついたという語源説もあった。「二親」に通じ、その卵が「カドノコ」（＝数の子）であることから子孫反映の象徴とされ、縁起物としておせち料理に用いられるということも分かった。

かなり硬いのを手で引きちぎって、皿に盛り付けてみた。手が脂でギトギトになる。食べてみると、歯ごたえはししゃもとスルメの中間ぐらいの硬さだが、しばらく噛むと噛むたびに、いわし、鯖、さんまのような干物の脂汁が繊維からじゅっじゅっと染み出し、なかなか美味しいものである。

見出しロシア語には「反芻」「反芻される食物」「噛みタバコ」という意味があるが、要するにクチャクチャと噛み続けること、あるいはそういう食物を「жвака」と言い、そこから「噛みたばこ」という嗜好品を指すようになり、現代語では「チューイングガム」類も指すようになっているのではなかろうか。

なぜ「反芻される食物」「噛みタバコ」のような語彙が『レクシコン』に掲載されているのだろうか。この答えの鍵は漂流民の記録を読んでみて了解した。『環海異聞』巻七「海上渡世する人は多くは吃烟する也。これはツンガ［按に青腿牙疳といふ病と見ゆ。別に記す。］といふ病を防くためなりと也」（杉本つとむ編『環海異聞』巻之七「土俗風習」第廿一）とある。「ツンガ」はロシア語「цинга」（懐血病）を写したものであるし、「青腿牙疳」も「壊血病」の類である。したがって文意は「航海に携わる人々は喫煙する、これは壊血病を防ぐためである」という意味である。つまり（その実効はともかく）、航海に携わる船員たちは喫煙やら噛みタバコをすることで壊血病を防ごうとしたものと思われる。

『レクシコン』が海事関係の語彙を多く掲載することはペトロワ氏の研究（ПЕТРОВА “≪ЛЕКСИКОН≫ РУССКО-ЯПОНСКИЙ Андрея Татаринова” ИЗДАТЕЛЬСТВО

ВОСТОЧНОЙ　ЛИТЕРАТУРЫ、москва)に指摘されている(江口2013「ペトロワの『レキシコン』研究について(前)」『岡山大学文学部紀要』60、同2014「ペトロワの『レキシコン』研究について(後)」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』37参照)。つまり『レクシコン』に「жвака」という語が掲載されるのも必然性があったのである。ところが「噛みたばこ」という習慣がなかった日本人は、「身欠きニシン」をおやつのように噛むことからの連想で「カド」を当てたのではなかろうか。

こう考えるといちおう辻褄が合うようだが、問題もある。身欠きニシンのことを『日本方言大辞典』では「宮城県、山形県などでは「かど」は生の鰊(にしん)を指し、干した身欠きのものを「にしん」と言って区別する」と記述するとある。たしかに、仙台漂流民の記録『環海異聞』では「青魚(カト)は四月始めよりとれ候て相用申候」(巻一)、「オヽモリといふ魚　鰊(カド)に似たり」(巻四)とあって、「カド」はニシンそのものを指すようである。

しかし、『レクシコン』では27b「омуль」(シロマス科オームリ)に「にしん」とあてている。つまり「反芻される食物」(あるいは「噛みたばこ」)が「カド」で、「シロマス科オームリ」が「ニシン」という関係になっていて、相違があるということになる。

実は「ニシン」と「カド」の関係は想像以上に複雑で、それぞれが指す内容が地域や時代によって異なっている。

『重訂本草綱目啓蒙』「有鱗魚／無鱗魚　四十」(国会図書館デジタルライブラリ)では「奥州、殊ニ南部、津軽、蝦夷ニ多シ。九十月ヨリ春二三月ニイタルマデ、トル者ヲ良トス。…(中略)…南部方言カド、背肉ノミ乾タルヲ、ニシント云。全クヒラキテ乾タルヲハ、ニシ(ママ)ト云。美味ナリ。」(句読点は江口。以下、同じ)

同「津軽ニテハ生者ヲニシント云、冬ニシン春ニシンノ名アリ。背肉ノミ乾タルヲ、ミガキニシント云」

『仙台浜荻』(小倉進平『仙台方言音韻考』刀江書院、1932)では「かど　ほしたるをにしんといふ。」

『採薬使記』(国会図書館デジタルライブラリ)では「重康曰、蝦夷松前ノ海ニ、「カド」ト云フ魚アリ。一名ハ「ニシン」トモ云フ」(「　」部分には傍線あり)

生のニシンと干物ニシンの呼称を「　／　」で表わすことにすると、南部では「カド／ニシン」、津軽では「ニシン／ミガキニシン」、仙台では「カド／ニシン」、『レクシコン』では「ニシン／カド」となる。蝦夷松前では生ニシンのみを「カド(一名ニシン)」と言い、干物ニシンについては言及がなく、姫路方言では干物ニシンのみを「ニシン」(あるいは「身欠き」)と言い、生ニシンには言及がない。

これらを考察する観点として生ニシンと干物ニシンの語彙的対立があるかどうかがある。『採薬使記』の場合、実際は生ニシンと干物ニシンの名称を区別しているが、文献では区別しないように書いているだけかもしれないが、生ニシンのみをニシンと呼んでいるとも考えられる。現代姫路方言は身欠きニシンのみが実生活に関係していて、生ニシンを呼ぶ名称がない。身欠きニシンのみを「ニシン」と言うのであって、語彙的対立がないということである。こうした地

域は生ニシンか干物ニシンか、いずれかの一方のみを主として利用している地域であることが分かる。

次に名前の主従がある。津軽の「ニシン／ミガキニシン」は「ニシン」が主たる名で、その調理法を利用して分析的に命名されたのが「ミガキニシン」ということになる。つまり名前としては、生ニシンが主で干物ニシンが従という関係にあることがわかる。これは直感的にも理解できることで、水揚げされた生の魚に一次的な名前が与えられ、その加工品に加工方法を付けて、二次的な名前が与えられることは現代でも普通である（ハマグリ～焼きハマグリ、椎茸～干し椎茸、カレイ～干しカレイなど）。

次に「カド」を使用するか否かという観点がある。津軽の「ニシン／ミガキニシン」には「カド」が語彙体系に関与していない。現代の共通語「ニシン／ミガキニシン」もカドを含まない表現である。

「カド」と「ニシン」では「カド」が古いのではなかろうか。「カズノコ」の元の語形は「カドノコ」で「カド＋ノ＋コ」である。これが縁起物として多産を表す「カズ（数）」と意味的に牽引して生まれたのが「カズノコ」という語形らしい。古い語形は複合語に残ることが多いという一般的傾向があるから、こうした観点からすると「カド」が古い語形と思われる。

またニシンは音配列形式としては漢語的形態を持つ。「二親」という語源説があるが、その当否はともかく、「ニシン」が漢語的な形態だから「二親」という漢語を当てるのである。漢語は和語よりも新しい語彙なので、形式として新しい語彙である可能性が高い。したがって「カド」を含まない「ニシン／ミガキニシン」は相対的にもっとも新しい言い方である可能性も高い。

文献上の出現でもカドが若干早く、ニシンは遅れて室町後期に出現する。京都大学附属図書館本『宣賢卿字書』十四「魚類」8行目（pp22　京都大学電子図書館による）に「鰊　カト」、「四季物語（14c中頃か）一二月「しだ、ゆづりはといへるも、ささしまめかどのうを、心ぶとの御まはりの下にしかれて」（『日本国語大辞典　第二版』による）とあり、『文明本節用集』（勉誠社影印本）87-4に「鯡　ニシン」、『書言字考節用集』には「鯡　ニシン」「鰊　カト」両方がある。もっとも『四季物語』の例は稲田利徳「「徒然草」と「四季物語」」（『岡山大学教育学部研究集録』131、2006）を参考にすると14世紀までは遡らないと思うし、『書言字考節用集』のカドの用例は佐藤貴裕「東西方言対立語からみた『書言字考節用集』の性格」（『国語学』147、1986）が述べるように江戸語が収録されていると思われる。そういう用例を保留したとしても、室町後期には両者ともに用いられていたと思われる。

次にその「カド」が主として生ニシンに用いられるかどうかという観点がある。「カド」が主たる地域（南部、仙台、蝦夷松前）とニシンが主たる地域（『レクシコン』、津軽、共通語、現代姫路方言）という分類ができる。

以上のような観点から分類してみると次の表が得られる。

<table>
<tr><td colspan="3">語彙的対立なし(ただし生ニシン中心)</td><td>カド　ニシン　／　Ø</td><td>蝦夷松前</td></tr>
<tr><td rowspan="5">語彙的対立あり</td><td rowspan="2">「カド」を含む</td><td rowspan="2">カドが主</td><td>カド　／　ニシン</td><td>南部</td></tr>
<tr><td>カド　／　ニシン</td><td>仙台</td></tr>
<tr><td rowspan="3"></td><td rowspan="3">ニシンが主</td><td>ニシン　／　カド</td><td>『レクシコン』</td></tr>
<tr><td rowspan="2">「カド」を含まない</td><td>ニシン　／　ミガキニシン</td><td>津軽</td></tr>
<tr><td>ニシン　／　ミガキニシン</td><td>共通語</td></tr>
<tr><td colspan="3">語彙的対立なし(ただし干物ニシン中心)</td><td>Ø　／　ニシン(ミガキ)</td><td>姫路方言</td></tr>
</table>

語彙的区別がない蝦夷松前や姫路方言は別として、語彙的対立がある地域に注目すると、『レクシコン』の語彙体系はカドを含む点では南部方言的だが、ニシンが主である点では津軽や共通語的であるといえる。またカドを中心とする古い語彙体系からニシンを中心とする新しい語彙体系の中間に位置するとも言える。カドが古語と化して、ミガキニシンにとって替わられる直前の語彙体系を示すとも言える。

こうした点、『レクシコン』は非常に特異な語彙体系を有していると思われる。これらはちょうど『レクシコン』が反映する方言が下北佐井方言であり、佐井が津軽と南部・松前を結ぶ中継地点であること、佐井が海運航路の中継地点として関東・関西方言などの新しい語彙体系とも接触する機会があったこととも符号する。

また佐井村の個別事情もあった。むつ市立図書館の山本隆悦氏に岡田一二三『南部の方言』(1996、伊吉書院)の記述をお教えいただいた。これによれば、「カド」といえばかつては普通「ニシン」を指していたが、その後「カド鮫」(カトウ鮫とも。ネズミザメのこと)を指すのが普通になったらしい。またさらに山本氏のご教示によって『佐井村誌』(佐井村役場、1971)を見てみると、ニシンの漁獲は明治ごろまで続いたようであるが、カド鮫のほうが圧倒したらしく、「カド」といえばカド鮫を指すというように変化していったと思われる。ただし「カド鮫」も「カド」単独では呼ばれていないようなので、完全に置き換わっているわけではなさそうである。佐藤政五郎編『第二版　増補新版　南部のことば』(1987　伊吉書店)でも「カド」には「かどんさめ」(もうか鮫)と「かどにしん」という言い方もみられる。現代ではカドという語は単独で事物を指示しておらず、結局、語彙の主たる位置を占めておらず、複合語の修飾成分として化石的に残っているにすぎないということだと思われる。

津軽・南部・松前を結び、関東・関西との中継地点という地理的な事情や、「カド鮫」への置き換わりも含め、「カド」という語の修飾成分への転化という特殊事情などから、『レクシコン』の「ニシン／カド」の語彙体系は他の地域とは異なる特殊性を有していたのだと考えられる。

以上、『レクシコン』の「カド」という語彙をめぐって考察してきた。山本隆悦氏に伺ってみても、もうニシンも捕れないとのことである。そうすると『レクシコン』は単に昔の語彙を収録しているというだけでなく、失われた生活も反映しているということになる。この考察が失われた言語や生活について、少しでも人々の実感を伴うような姿で浮きあがらせることができたのであれば幸いである。

「オド」について

013aに「жена　мужняе」（夫のある女性）という見出しロシア語があり、「одоно　ару　втоをとのある　ひと」と訳されている（なお、原文ではｏはω文字が使用されているところがあるが、ｏで表記する）。「オドノ　アル　プ゜ト」という表記である。ロシア語と日本語の対応から「オド」は「夫」に対応させたくなり、事実、村山七郎『漂流民の言語』（吉川弘文館、1965）では「夫のある妻」と訳している。しかしそれが正解だろうか。

というのは東北方言ではもともと促音があったときの後続音は有声化しない、とされているからである。したがってもし「オット」から「オド」が生じたとなると、有声化している点は東北方言的であるが、もともと促音のあった場所に後続してタ行の有声化が生じたとすると、逆に例外となってしまうのである。筆者は『レクシコン』が下北方言（特に佐井村）の言語事実をかなり忠実に反映していると考えているが、そのためにも、こうした一見例外的にみえる現象にも説明が必要であると思う。そこで、タ行のなかで、どのような場合に有声化し、どのような場合に有声化しないかを調査してみた。チとツの有声化は四つ仮名の問題と関係するので別稿（江口「タタリノフ著『レクシコン』からみた18世紀下北佐井方言の四つ仮名」）に譲る。全体のなかで例外のように見えるのは「オド」の他に以下のような例がある。

40aに「ヤマイト」（病人）という例がある。『日本方言大辞典』に「病人」の意味で本例を採用する。『野辺地方言集』にも「ヤメト」とあり、東北地域に広がる語形と思われる。しかしながらトは母音間にありながら有声化していない。なぜ有声化していないのだろうか。

この語は古くから中央語にあり、『玉塵抄』三「老よりきわまってやまいとの如なとわれと云たぞ」の例が『日本国語大辞典』に掲載されている。ヤマイトはヤマヒヒトがハ行転呼音化し、長音化した形式（ヤマヒ・ヒト→ヤマイ・イト→ヤマイート）、あるいはヒが無声化を経て促音化した形式（ヤマヒ・ヒト→ヤマヒ・ピ゜ト→ヤマヒット）だと思う。長音のあと、あるいは促音のあとという音声環境上の理由でヤマイトのトは語中有声化しなかったのだと思われる。

なお中央語には御伽草子・高野物語「ますかみくりてうめきしは、ただやまうどにことならず」、『日葡辞書』には「yamŏdo」（ヤマウド）がある。これはトの部分が濁音だったようだが、ナカ＋ヒト→ナカウド、ワカ＋ヒト→ワカウド、アキ＋ヒト→アキンド、アヅマ＋ヒト→アヅマウドのようにヤマイ＋ヒト→ヤマイウト（ド）とウ音便化（あるいは音声的には鼻音化）した語形であり、それゆえ中央語ではトの部分が濁音化したのだと思われる。ちょうどハ行四段動詞が東日本で促音便「買って」、西日本でウ音便「買うて」となるようなもので、『レクシコン』が反映するのは前者のタイプだと考えられる。したがってトが有声化していないのだと考えられる。

また、10bに「дожйдаюсь」（待ちうける）に対して「мажде　імасъ　まちています」という日本語の例がある。「マジ゜デ　イマス゜」（待ちています）である。10bにも「дождался」（待ち受けた）に対して「мажде　імашта　まちて　いました」（マジ゜デ　イマシ゜タ　待ちていました）、26aの「неожидай」（待つな）に「мажде　ісашарна　まちて　いさしやるな」（マジ゜デ　イサシャル゜ナ　待ちていさしゃるな）がある。

前稿「A.タタリノフ『レクシコン』注釈２（Ｂ～Ｅ）」（『岡大国文論稿』43　2015.3）において、促

音のあとで接続助詞テが濁音化するのはおかしいとは思っていたが、語彙的な例外もありうるかもしれないと考えて「мадде」（マッデ　待って）と翻字した。その後、「待つ」という動詞は東北方言では「マヂル」という語形が広く分布していることがわかった。例えば佐藤政五郎編『第二版　増補新版　南部のことば』（1987　伊吉書店）でどのように活用しているかを確かめてみると、「まづでいさい［待っていなさい］」「まぢる・まづる」「まぢれ・まぢろ［待て・待っていろ］」とあって、「待つ」は南部方言では上一段化して「マヂル」という語形であることが分かった。改めて『レクシコン』本文を確かめてみると、「д」字ではなく「ж」字であった。『レクシコン』はその語形「мажде」（マジ゛デ）を反映していると考えられる。前稿を訂正したい。

したがって上一段化した語形なので、「オキル」（起きる）が「オキテ」となるのと同様に「マチル」が「マチテ」となって、語中のタ行が有声化して「マヂデ」という語形になっていると考えられる。キリル文字による表記がジ（жи）になっていて母音表記がないのは母音の無声化ではなく、この場合、表記上の問題だと考えられる。

こうして個別の事情のあるものを処理し、タ行の非有声化を分類すると以下の表になる。

		タ	テ	ト
語頭相当	語頭	40例 （タイコ 太鼓4b） （タマ　球　5a）など多数	30例 （テゴ 梃子 2a） （テジダイ　手伝い 3a） （テニ゛キ 天気 6b）など多数	32例 （トラシャレ　取らしゃれ　2b） （トド　父　2b） （トリガイマス゛　取り替えます　4b）など多数
	複合語の形態素頭	ナシ	2例 （ニガリテ　右手　32a） （フダリテ　左手32b）	1例 （クゥイト　食いとう 16b）
	接尾語	1例 （モモタ　腿　20b）	ナシ	ナシ
促音のあと	тът表記	1例 （アラト゛タ洗った　23b）	ナシ	ナシ
	тт表記	1例 （アヤマッタ　誤った 47a）	4例 （ダマッテ　黙って30a） （アヤマッテ　誤って 46b） （ナガナオリ　ナッテ仲直りなって　46b） （オモッテ　思って　48b）	ナシ
	無表記	ナシ	1例 （ワズ゛ラテ　患って 16b）	ナシ
無声化のあと		71例 （動詞＋マシ゛タなど）	5例 （動詞＋シ゛テ　27b、28a）など	60例 （フ゛ト　人）など多数
撥音のあと		ナシ	ナシ	4例 （シ゛ラント　知らんと 27b） （ファントギ　半時 29a） （ダジントリ　駄賃取り　44a） （ナント　何と　45a）

有声化しない場合、タ行が語頭あるいは語頭に準ずる位置にある場合、促音のあと、母音の無声化のあと、撥音のあとに位置する場合である。これは現代東北方言で指摘されているタ行

の語中有声化の条件と等しい。つまり促音のあとではタ行は有声化しないのである。

したがって「オド」を「夫」に引き当てるのは間違いだということになる。そこで「オド」という語形を調査してみると、『日本方言大辞典』に記載があるように「主人、夫」の意味を持つ「おとー」（お父さん）、佐藤政五郎編『第二版　増補新版　南部のことば』（1987　伊吉書店）に記載があるように、「おど　［年輩の男の傭人］②父。③年輩の男性」に引き当てるべきだということになる。

こうしてみると『レクシコン』掲載の語彙を語形が類似しているという理由で、共通語に引き当てることはかなり危険かもしれない。逆に『レクシコン』の多数例から帰納できる音韻規則にのっとって、そういう語形があったかもしれないという演繹的方向から考察することによって、下北地方の方言的事実を浮かび上がらせることが可能になるように思う。

12bに「жарко」（暑い　熱い）に「ацуй　あつい」とあって、キリル文字日本語は「アツイ」と読める。村山『漂流民の言語』も「暑い」とするが、上述の考察からすると、ツが有声化していないので、ツの前部分に促音があると考えたほうが良いのではなかろうか。「あっつい」に相当する日本語を当てたと考えたほうが良いのではなかろうか。これなども『レクシコン』の口語的事実を反映した例と考えられる。

『レクシコン』は丁寧語「マス」を使用するなど、規範的な日本語を目指した姿勢はうかがえるが、具体例を読み解いていくと、下北方言をかなり忠実に反映していると考えて良さそうに思う。

注釈（Ж～И）

【Ж】						
244	012b	жер´тва	（供物）	негайгодо	ねかいこと	ネガイゴド（願い事）
245	012b	жерт´вують	（寄付する）	негаймасъ	ねかいます	ネガイマス゜（願います）
246	012b	желаю	（願う）	ю̃йгодо　обоймасъ	よイこと　をぼ゜います	ヨイゴド　オボイマス゜（良い事覚えます）
		＊ロシア語は「желать」（思慕する）参照。				
247	012b	жалею	（思慕する）	канаши　гаймасъ	かなしかります	カナシ　ガリマス゜（悲しがります）
		＊ロシア語は「жалить」参照。				
248	012b	жалуюсь	（文句を言う）	кодовари　масъ	ことわります	コドワリ　マス゜（断ります）
249	012b	жгу	（点火する）	цке　мас	つけます	ツ゜ケ　マス゜（つけます）
		＊ロシア語は「жечь」（焼く　燃やす　点火する）参照。				
250	012b	жгуся	（点火する）	цкемашймасъ	つけまします	ツ゜ケマシマス゜（つけまします）
251	012b	жаднйчаю	（むさぼるけちけちする貪欲なる）	фини＼н／но　ю̃да	ひ人のよた	フィニンノヨダ（非人のようだ）
252	012b	жар´ко	（暑い　熱い）	ацуй	あつい	アツイ（あっつい）
		＊村山『漂流民の言語』は「暑い」とするが、『レクシコン』の表記からすると、ツが有声化していないので、ツの前部分に促音があると考えられる。「あっつい」に対応する日本語を当てたと考えたほうが良いのではなかろうか。				

253	012b	жаваронокъ	（ヒバリ）	キリル文字日本語なし	ひらがな日本語なし	
		＊ロシア語は「жаворонокъ」参照。 o → a				
254	012b	жаров´никъ	（コンロ　火鉢）	р ӧрйба	りやうりば゛	リョリバ（料理場）
255	012b	желька	（きつつき　クマゲラ）	кера　цузурй	けつつり（ママ）	ケラツズリ（啄木鳥）
256	013a	жую	（噛みこなす）	каму	かむ	カム（噛む）
257	013a	ж´вака	（反芻）（噛みたばこ）	кадо	ひらがな日本語なし	カド（身欠きニシン）
		＊村山1965欠。 『教会スラヴ語ロシア語辞典』では「жвака」は「жвачка」（反芻　反芻される食物　噛みたばこ）と同じとある。 『日本方言大辞典』では東北地方ではニシンのことを「カド」と言うらしい。ニシンのなかに身欠きニシンという調理法があって、身欠きニシンはニシンを干して固く乾燥させたものを言う。古くはこれをかじっておやつ替わりにすることもあったということがネットなどでは散見する。 見出しロシア語には「反芻される食物」「噛みタバコ」という意味があるので、この「身欠きニシン」を噛むことからの連想で当てたと思われる。 身欠きニシンのことを『日本方言大辞典』では「宮城県、山形県などでは「かど」は生の鰊（にしん）を指し、干した身欠きのものを「にしん」と言って区別する」と記述するが、下北方言ではそうではなく、「カド」が「身欠きニシン」を指していたと考えられる。「まえがき」参照。				
258	013a	жес´токо	（厳しい　残忍な）	кадай	かたい	カダイ（堅い）
259	013a	желчь	（胆管）	і	イ	イ（胃）
260	013a	жена	（妻）	н ӧбо	みやうぼ゛	ニョボ（女房）
		＊村山『漂流民の言語』では「キリル文字日本語を「mjobo」と転写するが、１文字目は筆順の方向からは「н」字と読んでも良いのではなかろうか。				
261	013a	женатый му＼ж／	（妻帯している者）	н ӧбоно　ару　вто	みやうほのある　ひと	ニョボノ　アル　ブト（女房のある人）
262	013a	жена му＼ж／няе	（夫のある女性）	одоно　ару　втω	をとの　ある　ひと	オドノ　アル　ブト（お父のある人）
		＊村山『漂流民の言語』では「オド」は「夫」に対応させる。しかし「お父」に対応する語形だと思われる。東北方言では、もともと促音があったときの後続音は有声化しないことが多い。この方言でも同様で63オッカナイ→オカナイのようにもともと促音があった場合、後続のタ行音が有声化していない。しかし、本例は有声化しているので、『日本方言大辞典』「おとー」（お父さん）のトが語中有声化したと考えたほうが良いであろう。				
263	013a	женюся	（結婚する）	ӧме　торимасъ	よめ　とります	ヨメ　トリマス゜（嫁とります）
264	013a	женйться	（結婚する）	キリル文字日本語なし	ひらがな日本語なし	
		＊日本語が上行と同じを表すために｛　カッコで上行とくくってある。				
265	013a	женй＼х／	（新郎　花婿）	муго	むこ	ムゴ（婿）
266	013a	жени＼х／я	（婚約者）	ӧме　торимашта	よめ　とりました	ヨメ　トリマシ゜タ（嫁とりました）
267	013a	желъ　тротъ	（くちばし）	цуме	つめ	ツメ（爪）
		＊ロシア語は「желторотъ」（くちばしの黄色い　青二才）参照。　村山1965欠。				
268	013b	жеребець	（雄馬　種馬）	ко＼м／ма	こむま	コム゜マ（駒）
		＊『日本方言大辞典』は「こま」（雄馬）の用例として扱う。村山『漂流民の言語』は「コムマ」と写す。キリル文字日本語の表記は「コム゜マ」で「駒」意であろう。				
269	013b	жеребенокь	（子馬）	чйсай　у＼м／ма	ちさい　うま	チサイ　ウム゜マ（小さい馬）
		＊マ音の閉鎖が強く、あたかも撥音［mma］のように実現していたと思われる。ロシア語は「жеребёнок」（子馬）参照。				
【3】						
270	013b	зем´ля	（大地）	цуджй	つち	ツヂ（土）
271	013b	з´верь	（獣）	кедамоно	けたもの	ケダモノ（獣）
272	013b	зверуетъ	（残忍な振る舞いをする）	кедамоно　шймасъ	けたものします	ケダモノ　シマス゜（獣します）
		＊ペトロワ1962では「毛皮動物の狩猟に従事する」意とし、シベリア方言と指摘。				

273	013b	звезда	（星）	фошй	ほし	フォシ（星）
274	013b	здравтвуй	（おはようございます）	фйяшй　гозарйма＼с／	ひやし　こさります	フィヤシ　ゴザリマス゜（久しくございます）
		＊村山1965では「今日は（挨拶のことば）」とする。 「ヒヤシ」は「ひさし」の方言形と思われる。なぜなら『レクシコン』の方言では、フィサ音をフィヤ音とする傾向があるからである。類例としては399では「ヒシャク」を「ひやく」とする。村山七郎「アｰタタリノフの「レクシコン」の東北方言について」（『国語学』52、1963）は『庄内浜荻』に「ひさく」、『地域社会の言語生活―鶴岡における実態調査―』（国立国語研究所1953）に「現在ではヒヤクが多い」とあることから、「二百年前にはヒサクヒヤク両形が行われ、一方は『浜荻』に、他方は「レクシコン」に記録をとどめた」とする。佐藤政五郎編『第二版　増補新版　南部のことば』（1987　伊吉書店）には「ひやしぶり」［ひさしぶり］とある。				
275	013b	звездочетъ	（占星家）	фошй　миру　вто	ほし　みる　ひと	フォシ　ミル　フ゜ト（星見る人）
276	014a	зоря　утренняя	（朝の星）	асано　миод＼д／о	あさの　みをちやう	アサノ　ミオヂョ（朝の明星）
		＊村山1965では「mjoddo」と転写し「ミョッド」とカタカナ化する。転写はそれで良いと思うが、次行からみて原文は「миоджо」の書き間違いだと思う。				
277	014a	＋звезда вечерьня	（夕方の星）	банно　міо＼д／жо	は゛んの　みをちやう	バンノミオヂョ（晩の明星）
278	014a	зер´кало	（鏡）	кагамй	かかみ	カガミ（鏡）
279	014a	зер´но	（殻粒）	в´тоцубу	ひとつふ゛	フ゜トツブ（一粒）
280	014a	з´десь	（ここで）	когонй	こゝに	コゴニ（此処に）
		＊日本語「когонй」のあとに「ｅ」があって「когонйе」にも見えるが、筆癖であろう。				
281	014a	зйма	（冬）	фую	ふゆ	フユ（冬）
282	014a	зймной　день	（冬の日）	фуюно　фй	ふゆのひ	フユノ　フィ（冬の日）
283	014a	зймовье	（冬）	キリル文字日本語なし	ひらがな日本語なし	
284	014a	зймная　нощь	（冬の夜）	фуюно　ю̃ру	ふゆの　よる	フユノ　ヨル（冬の夜）
285	014a	забыль	（忘れた）	вас´ре　машта	わすれました	ワス゜レ　マシ゜タ（忘れました）
286	014a	забава	（気晴らし楽しい）	асубу	あすふ゛	アスブ（遊ぶ）
		＊ペトロワ1962の音声特徴の脚注16にオとウの混同例として指摘。しかし「あすぶ（遊）」は古くから中央語にもある語形である。				
287	014a	забавный	（おもしろい）	ю̃гу　чйсо　ширу	よく　ちそしる	ヨグ　チソ　シル（良く馳走する）
288	014a	＋завй＼д／лйвый	（うらやましがる）	сонему	ひらなが日本語なし	ソネム（嫉む）
289	014b	завидую	（羨む）	мане　штагаймасъ	まねしたが゜ります	マネ　シ゜タガリマス゜（真似したがります）
		＊村山1965脚注に「「が」が注目される。」とある。ペトロワ1962では濁音符号はバ行のみとしていたが、ガ行にも見られるという意味であろう。				
290	014b	задумчйвой	（物思いに沈んだ）	омо　фйто（ママ）	をもひと	オモ　フィト（思う人）
		＊「ヒト」のヒが無声化していないのが珍しい。				
291	014b	задумываюсь	（企てる　計画する）	омоймасъ	をもイます	オモイマス゜（思います）
292	014b	заделъ	（握りしめた　締めつけた）	фасамймашта	はさみました	ファサミマシ゜タ（挟みました）
		＊ロシア語は「зажать」（握りしめる　締めつける）参照。				
293	014b	зас´таль	（発見する）	імашта	イました	イマシ゜タ（居ました）
		＊ロシア語は「застать」（見出す　会える）参照。				
294	014b	замокъ	（城）	дж ю̃	ちやう	ヂョ（城）
295	014b	замочйлъся	（湿気のある）	нуремашта	くれました（ママ）	ヌレマシ゜タ（濡れました）
		＊ひらがな日本語が間違っている。キリル文字日本語の「н」と「к」の見間違えたと思われる。				
296	014b	засо＼х／ло	（からからに乾いた）	фймашта	ひました	フィマシ゜タ（乾ました）

297	014b	заплеснело	（カビの生えた）	кабуремашта	かふ゛れました	カブレマシ゜タ（かぶれました）
		＊ロシア語「заплесневело」（カビの生えた）参照。				
298	014b	заецъ　ушканъ	（コウモリウサギ）	усангй	うさんき	ウサンギ（兎）
		＊ロシア語「заяц　ушканъ」参照。				
299	014b	закрыль	（閉じた）	вташймашта	ひたしました（ママ）	フ゜タシマシ゜タ（蓋しました）
		＊ロシア語は「закрыть」（覆う　蓋をする）参照。				
300	014b	закрой	（閉じろ）	втаса＼с／шаре	ひたさしやされ（ママ）	フ゜タサス゜シャレ（蓋さっしゃれ）
301	014b	заткнй	（栓をしろ）	са＼са／шаре	ささしやれ	ササシャレ（挿さしゃれ）
		＊村山1965では「заткий　不明」とするが、「заткнй」とよみ、「заткнуть」（栓をする　突く）の命令形としてはどうだろうか。				
302	015a	замнкнй	（錠を下ろせ）	оросашаре	をろさしやれ	オロサシャレ（下ろさしゃれ）
		＊ロシア語は「замкнуть」参照。				
303	015a	замкнуль	（錠をおろした）	орошимашта	ｏ（ママ）ろしました	オロシマシ゜タ（下ろしました）
		＊ひらがな日本語で「お」のかわりに「ｏ」文字を書く。「замкмуль」にも見える。				
304	015a	затопи	（ストーブなどを焚きつけろ）	тагасъшаре	たかしやれ	タガス゜シャレ（焚かっしゃれ）
305	015a	затопйлъ	（焚いた）	тагймашта	たきました	タギマシ゜タ（焚きました）
306	015a	затоплю	（焚く）	тагимасъ	たきます	タギマス゜（焚きます）
307	015a	за＼б／рось	（投げろ）	нагесашаре	なけさしやれ	ナゲサシャレ（投げさしゃれ）
308	015a	запрйметйль	（気づいた）	обойде　імашта	をほいて゛いました	オボイデ　イマシ゜タ（覚えていました）
		＊「て」のあとに濁点がある。ペトロワ1962では濁点はハ行のみとするが、そうではないと思う。				
309	015a	замараль	（着物などを汚した）	ѿгошймашта	よこしました	ヨゴシマシ゜タ（汚しました）
		＊ロシア語は「за＋марать」参照。				
310	015a	заверну＼л／	（包まれた）	тадамймашта	たゝみました	タダミマシ゜タ（畳みました）
311	015a	забросйль	（遠くへ投げ捨てた）	нагймашта	なきました	ナギマシ゜タ（投げました）
312	015a	застава	（関所）	баńшо	はイしやう（ママ）	バンショ（番所）
		＊ひらがな日本語はイ表記だがキリル文字日本語は撥音表記。撥音をイ表記とする。				
313	015a	заплываю	（泳いで入り込む）（薄膜で覆われる）	норезгимасъ	のれ　つきます	ノレズ゜ギマス゜（ノレつきます）
		＊ロシア語は「заплыть」（泳いで入り込む　薄膜で覆われる）参照。「のれ」と「つきます」の間にスペースがあるので、「ヅキマス」が連濁しているものの、その前に意味の切れ目があると想定して、「（どろどろの）薄膜で覆われる」ととって「糊つきました」と考えることも可能かと思う。佐藤『南部のことば』には「のれっと　泥や大便やその他の汚物が広く体についたさま」とある。				
314	015a	заплыль	（泳いで入り込んだ）（薄膜で覆われた）	норе　згимашта	のれ　つきました	ノレ　ズ゜ギマシ゜タ（ノレつきました）
		＊ロシア語は「заплыть」（泳いで入り込む　薄膜で覆われる）参照。				
315	015a	завязалъ	（結ばれた）	мусубимашта	むすひました	ムスビマシ゜タ（結びました）
316	015a	завяска	（紐）	фйбо	ひぼ゛	フィボ（紐）
		＊ロシア語「завязка」参照。ロシア語は無声音の前のｚ→ｃに表記されており、発音とおりの表記となっている。				

317	015b	зажйгаю	（点火する）	ягймасъ	やきます	ヤギマス゜（焼きます）
		＊ロシア語は「зажигать」「зажечь」（点火する）を参照。				
318	015b	затылокъ；	（後頭部）	боногубо	ぼ゛のくぼ゛	ボノグボ（盆の窪）
		＊堀季雄『浜荻』に「江戸にてゐりもとを庄内にて　ぼんのくぼ又ぼんのくど」とある。				
319	015b	заушйца	（耳下腺炎）	мйми　бу＼д／жй	みみふ゛ち	ミミブヂ（耳斑）
		＊ロシア語「заушница」（耳下腺炎）参照。				
320	015b	занозйль	（トゲで刺した）	сашимашта	さしました	サシマシ゜タ（刺しました）
321	015b	зарекой	（川のそば）	кавабадано	かわば゛たの	カワバダノ（川端の）
		＊ロシア語「за＋рекой」参照。				
322	015b	заморемь	（海のほうへ）	умйса	うみさ	ウミサ（海へ）
		＊方向を示すサが付いた形。ロシア語「за＋моремь」参照。				
323	015b	зас´толомъ	（食事中）	Фа＼н／ндай　са шйяримашта	はんたい　さ　しやりました	ファンダイ　サ　シヤリマシ゜タ（飯台さ　しやりました）
		＊「за＋стол」（前置詞＋食卓）				
324	015b	зас´тулмъ	（食事中の）	キリル文字日本語なし	ひらがな日本語なし	
325	015b	задверямй	（ドアのうしろ）	тоно　вагйнй	とのわきに	トノ　ワギニ（戸の脇に）
		＊ロシア語は「за＋дверямй」参照。　『日本方言大辞典』では「わき　他所。よそ」として「岩手県気仙郡。秋田県。福島県相馬」などが挙げられている。下北方言でも同様であったと思われる。				
326	015b	зеленая	（緑）	авой	あをい	アヲイ（青い）
327	015b	земчленйца	（苺）	іжйнго	いちんこ	イジンゴ（苺）
		＊ロシア語「земленика」参照。				
328	015b	з´мея	（蛇）	фебй	へび゛	フェビ（蛇）
329	015b	запонъка	（カフスボタン）	キリル文字日本語なし	ひらがな日本語なし	
330	015b	замара＼л／ся	（汚した）	ю̃гошй　машта	よこしました	ヨゴシ　マシ゜タ（汚しました）
331	015b	заранъ	（裾）	майдарй	まいたり	マイダリ（前垂れ）
		＊ロシア語「зарах」（衣服の裾　かき合わせ）を参照。ペトロワ1962では「エプロン」意でシベリア方言とする。				
332	016a	знакъ；маякь	（印；標識）	сагай	さかい	サガイ（境）
333	016a	+звонятъ	（鈴　鐘を鳴らす）	кане　нарймасъ	かね　なります	カネ　ナリマス゜（鐘鳴ります）
		＊ロシア語「звонить」（鈴　鐘を鳴らす）参照。				
334	016a	+знаетъ； знаю	（知っている；私は知っている）	обойдемасъ	をぼ゛いてい（ママ）	オボイデマス゜（覚えてます）
335	016a	+знаюш´ли； знае＼т／ли	（通暁したか　知っているかどうか）	обойдемаска	をぼ゛いてますか	オボイデマス゜カ（覚えてますか）
336	016a	заплотъ	（柵）	кагй	かき	カギ（垣）
		＊ペトロワ1962では「柵」でシベリア方言とする。				
337	016a	заплатй	（支払え）	смасасъшаре	すまさしやれ	スマサス゜シャレ（済まさっしゃれ）
338	016a	заплатйть нехоще＼т／	（支払いをしたくない）	смасанаидо юима＼с／	すまさないと　ゆイます	ス゜マサナイド　ユイマス゜（済まさないと言います）
【И】						
339	016b	із´вес´т´нос´ть	（有名）	обойданогодо	をほいたのこと	オボイダノゴド（覚えたの事）
340	016b	із´ветъ о＼т／явленйе	（出現から密告）	キリル文字日本語なし	ひらがな日本語なし	
		＊ロシア語は「извет（密告）＋от＋явленй（出現　現象）」と分解できるが、よく分からない。				

341	016b	ізнемогаю	（疲れ果てる）	вазрате　імасъ	わすらてイます	ワズ゛ラテ　イマス゛（患っています）
342	016b	істй＼н／на；правда	（真実；正義）	キリル文字日本語なし	ひらがな日本語なし	
343	016b	імъбйрь	（生姜）	шогу	しやうく	ショグ（生姜）
		＊長音のあとの語末ア段がウ段に狭くなっている。『レクシコン』の母音体系については別に論ずるが、その一部は江口近刊「タタリノフ著『レクシコン』からみた18世紀下北佐井方言の四つ仮名」で触れた。				
344	016b	ін´струментъ	（道具）	キリル文字日本語なし	ひらがな日本語なし	
345	016b	ігла	（針）	фарй	はり	ファリ（針）
346	016b	ізба；　илй домъ	（小屋；あるいは家）	іе	イ江	イエ（家）
347	016b	іскры	（火花）	фйбогорй	ひぼ゛こり	フィボゴリ（火埃）
		＊佐藤政五郎編『第二版　増補新版　南部のことば』（1987　伊吉書店）に「ひぼこり　炉の火を掻き回した時立つ埃」とある。				
348	016b	ікра	（魚卵）	саганано　ко	さかなの　こ	サガナノコ（魚の子）
349	016b	ікры　уногъ	（足のふくらはぎ）	кобура	こふら	コブラ（腓）
		＊村山1965では「икры」は「魚卵」、「укогъ」と写し、意味は不明とする。 次のように考えればどうだろうか。「ікры」は「икра」（ふくらはぎ）の複数形、村山が「укогъ」と写したのは実は「уногъ」で、「у＋ногъ」（所有を表す前置詞＋足」のように二語に分かれるのではなかろうか。 つまりロシア語部分は「ікры　у　ногъ」（＝「足のふくらはぎ」）と読んではどうだろうか。こうするとコブラ（こむら返りなどのコムラ）という語形とも対応すると思う。江口「A.　タタリノフ『レクシコン』注釈1（А～Б）」（『岡山大学文学部紀要』62　2014.12）参照。				
350	016b	іщй	（探せ　尋ねよ）	тазнесащаре	たつねさしやれ	タズ゛ネサッシャレ（尋ねさしゃれ）
		＊щ文字を用いて[-ʃʃ]の発音を表したものと思う。ロシア語は「искать」（探す）参照。				
351	016b	іщу	（探す　求める）	тазнемасъ	たつねます	タズ゛ネマス゛（尋ねます）
352	016b	ість　хощу	（食べたい）	квуйто　гозару	くいと　こさる	クゥイト　ゴザル（食いとう御座る）
353	016b	іду	（行く）	ігймасу㈹	いきます	イギマス（行きます）
		＊「行きます」の語末スに母音が付されているのは珍しい例である。この方言では敬語の語末の母音が脱落するのが普通である。				
354	017a	іней	（霜　氷柱）	юа	ゆあ	ユア（ゆあ）
355	017a	ічетъ	（くしゃみをする）	шакурй　шйма＼с／	しやくりします	シャクリ　シマス゛（しゃっくりします）
		＊ロシア語「ічетъ」はよくわからない。キリル文字日本語ではクが有声化していないので、クの前が促音相当であったと思われる。村山1965は「しゃっくり」に当てている。語形としてはもっとも確率が高いと思う。『日本方言大辞典』によれば東北地方では「しゃっくり」は「くしゃみ」を意味するようである。				
356	017a	ін´де	（だから　それゆえ）	вагуса	わくさ	ワグサ（訳さ）
		＊村山1965では「「инде」はロシア語の意味不明」とする。 ロシア語には「инда」（だから）や「индо」（それゆえ）がある。「ワグサ」のサは東北方言の助詞サとみて、「訳サ」と考えてはどうだろうか。				
357	017a	історнйкъ	（源泉）	вагй　мйзу	わきみつ	ワギミズ（湧水）
358	017a	історлйнъ　сиренъ	（巨人）	чкара　нарувто	ちから　なるひと	チ゛カラ　ナルフ゛ト（力なる人）
359	017a	ізьподь；нйзъ	（下から；底から）	кшта	くした	ク゛シ゛タ（下）
360	017a	імъ	（これら）	конодашу	このたしやう㈹	コノダシュ（こなた衆）
		＊「我だ衆」「このだ衆」という語彙体系があったものと思われる。				
361	017a	імя	（名前）	на	な	ナ（名）
362	017a	імяную	（名前を言う）	юймасъ	ゆイます	ユイマス゛（言います）
363	017a	іздержу	（お金を消費する）	цкаймасъ	つかいます	ツ゛カイマス゛（使います）

364	017a	із´держаль	（お金を使った）	цкаймашта	つかいました	ツ゜カイマシ゜タ（遣いました）
365	017a	ізтратиль	（費やす）	キリル文字日本語なし	ひらがな日本語なし	
		＊上行と同じという意味で｛　カッコでくくってあり、日本語は示されていない。				
366	017a	із´правйлъ	（支配する管理する）	косаимашта	こさいました	コサイマシ゜タ（拵えました）
367	017a	іздря＼б／ло	（しおれた）	фимашта	ひました	フィマシ゜タ（乾ました）
		＊ロシア語は「из＋дрябла」（前置詞＋しおれた）参照。				

（続く）

付記：平成26年～平成28年度「十八世紀青森下北方言を反映するタタリノフ『レキシコン』についての文献方言史的研究」（課題番号26370536）の支援を受けた。また「下北を知る会」会員諸氏や青森県八戸工業大学の諸先生方からもご教示を得た。記して感謝申し上げる。

（えぐちやすお　岡山大学大学院社会文化科学研究科）